

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：21601

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K14163

研究課題名（和文）親の期待に対する子の意味づけと適応の変容プロセス：混合研究法を用いた国際比較研究

研究課題名（英文）The Changing Process of Child Implications and Adaptation to Parents' Expectations: An International Comparative Study Using Mixed Research Methods

研究代表者

春日 秀朗（Kasuga, Hideaki）

福島県立医科大学・医学部・助教

研究者番号：70760239

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、以下の2つの成果が得られた。一つ目は、親からの期待が問題になるときの要因の一つは、全体的な親子関係の良し悪しというよりも、子どもが親から承認され、応援されているという感覚が得られないことであった。二つ目に、親からの期待に対する否定的な行動をとることは、子ども自身にとっても後悔の対象であり否定的に受け止められがちであるが、キャリアを主体的に決定しているという感覚によって否定的な受け止め方が低下することが示された。以上から、親からの期待を巡る問題を子どもの視点から解決するには、親からの承認を得られなかったことへの納得、キャリアの主体的決定感の養成が重要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来は、親の期待が子どもにとって問題となるときには親が変わることの重要性が指摘されることが多く、子ども自身がどのように受け止めているのか、また子ども自身が実行可能な対処は何かがあるのかについてわかっていることは少なかった。本研究では、子どもが親から否定されず、承認されたという感覚が子どもにとって重要であることを抽出することで、期待が問題となるメカニズムの一端を明らかにするとともに、主体的に物事を決定したという感覚の養成という、子ども自身の認知的傾向の獲得によって問題の解消・低減が可能であることを明らかにし、総合的なモデルを作成した点に本研究の意義がある。

研究成果の概要（英文）：The following two major results were obtained in this research project. First, one of the factors when parental expectations became a problem was not so much the overall good or bad parent-child relationship, but rather the child's inability to feel approved and supported by his or her parents. Second, while negative behavior in response to parental expectations tends to be regrettable and negatively perceived by the children themselves, the sense that they are making proactive career decisions was shown to reduce negative perceptions. From the above, when dealing with issues surrounding parental expectations from the child's perspective, it is important to cultivate a sense of acceptance of the lack of parental approval and a sense of proactive career decision-making.

研究分野：発達心理学

キーワード：親からの期待 青年期 親子関係 精神的健康

1. 研究開始当初の背景

親の期待に対する子の適応は、子にとって重要な発達上の課題である。期待に応える行動(期待受容行動)は、それ自体あるいはその成果が、子の承認欲求の充足に繋がり、精神的健康や課題成績などの向上に寄与するのに対し、期待に応えない行動(期待回避行動)は悪化に繋がるとされてきた。

近年、個人の自立という観点から、特に青年期後期においては、期待回避行動を主体的に選択できるようになることが発達上の重要な意味を持つことが指摘される。これは、ただ言われるまま期待に応えることや、親への反発から反抗的な行動をとることとも異なる、自分の意志で行動を選択することを指す。

期待受容行動・期待回避行動ともに、肯定的に意味づけられた場合には選択されやすいと想定されるが、期待回避行動に対する肯定的な意味づけに着目した実証的研究は乏しい(図1)。そのため、青年期に期待回避行動を獲得していく過程は不明瞭なままとなっている。また、期待回避行動の文化差を踏まえた研究は乏しく、ある特徴が青年に共通するのか、日本文化に特有なのか整理されていない。期待回避行動の獲得は、誰もが通る自立への過程とも言えるが、その研究基盤となる知見が不足していた。

		肯定的な意味づけ			
回避	本研究	励み 承認欲求充足	受容	反発・反抗 自己効力感低減	負担 精神的健康低下
				否定的な意味づけ	

図1 親の期待に対する行動と意味づけについての先行研究と本研究の位置づけ

2. 研究の目的

本研究は、「青年が期待回避行動を肯定的に意味づけるようになるためには何が必要なのか?」の問いを立て、期待される側である子どもが主体的に期待に適応するための方略はどのようなものがあるのか、それを促進・疎外する要因は何なのかを検討することで、期待回避行動の選択可能性を高め、親の期待に子どもが適応するためのモデルを提案することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、課題(1)期待回避行動とその意味づけの変容プロセスの記述、課題(2)期待回避行動の意味づけに影響を与える要因とその程度の同定、課題(3)期待回避行動とその意味づけに文化が与える影響、の3つの課題を設定し、検討した。

(1) 課題(1) 期待回避行動とその意味づけの変容プロセスの記述

子が親からの期待に対し、期待受容・回避行動を選択し、意味づけてゆくプロセスの中で、行動の理由・目的等の意味づけをどのように構築し変容させていくかを質的に検討した。

大学生9名を対象に半構造化面接によるインタビュー調査を行い、これまでの人生において、主に親からの期待に対し、どのような行動を選択したか(期待受容・回避行動の分岐点)、期待に対する自身の行動に対して意味づけが成されるまでに発生した出来事や要因、行動に対する評価・意味づけ、の3点に焦点を当てて語りを得た。インタビューによって得られた語りデータに対してKJ法を用いて分析を行い、情報の集約および図化した。

(2) 課題(2) 期待回避行動の意味づけに影響を与える要因・文化差の検討

課題(1)の結果を踏まえ、調査票を作成し、期待回避行動の肯定的な意味づけに影響を与える要因とその程度を分析し、適応的な状態に至るまでのモデルを定量的に検証した。

COVID-19の感染拡大や国際関係の緊張を受けて、調査会社に委託してウェブ調査を行った。日米の大学生を対象に「感じた期待や選択した行動、これを受けての精神的な適応の指標として時間的展望、家族関係、キャリア決定における「主体的に選択している感覚」の指標として、拡張されたキャリアの責任を測定した。

4. 研究成果

(1) 課題(1)

研究課題(1)では、大学生の回想から、大学進学時において子どもや親子関係に生じる問題はどのようなもので、どのような背景によって生じるのかを抽出した。またその問題に対して子どもがどのように対処したのか、その結果が現在にどのように関連しているのかについて抽出し、それらの関係性を踏まえて図化し、大学進学時における親子関係を巡る問題と対処についてのモデルを提示した。また課題(2)を通して、大学進学時の種々の決定において、子ども自身で「主体的に選択している感覚」が重要なのではないかという仮説が生成された。

(2) 課題 ・)

課題)で生成された仮説を踏まえて、課題 ・ では親からの期待に対する自身の行動の評価はどのようになされ、自身の精神的な要素にどのような影響を与えるのかを、日米の大学生の比較を通して検討した。その結果、「主体的に選択している感覚」は日本の大学生においてもアメリカの大学生においても肯定的な影響が見られたが、そのあらわれ方は日米で異なっていた。期待や親子関係、期待に対する自身の行動への否定的な評価やその影響に対して、アメリカ人の大学生は「主体的に選択している感覚」があることで肯定的な影響が新しく見られるようになったのに対し、日本では否定的な影響が消える形で見られた。日本人の人間関係は～アメリカの関係は～それぞれの文化や家族を理解し、適切に対処することが望ましい。

(3) 進路決定時において生じる問題とその対処についての総合的なモデル

以上の2つの成果を総合し、親子関係における期待を巡る問題と対処について総合的なモデルを作成した(図2)。なお、本モデルでは原則として親の期待をどのような進路に進むかという「進学期待」を想定している。モデル上部では親の期待に対して適応的な経験をした径路、下部では期待に対して適応困難な経験をした径路示している。

まず子どもの進路形成においてどのような「自己と親」が見られたのかについて、子ども自身の意志に関わる要因として、彼らの【関心】および【能力】、その進路によって獲得が予想できる【メリット】を抽出した。その一方で、親からの期待として、親とは異なる役割を望む【親の補完】、親ができなかったことを代わりに成してほしいという【親からの同一化】、親が職業に対して抱くイメージ、価値観から子どもにその進路を望む【親の価値観】の3つを抽出した。

次に、形成された進路を目指す過程で生じた「主な問題、ストレス源」について検討した。こちらでは、主に子どもが自身の学業成績、受験活動中に感じた、学力的な面を中心とした【個人的な困難】、医学部というものを目指す中で経験した、学習習慣や成績に対する【一方的・強制的・厳しい親子関係】、親の希望を取り入れた/取り入れさせられたことによって生じた【自分のものではない決定】という感覚の3つを抽出した。

【個人的な困難】を経験した際に、その解決に寄与した要因としては、自身が【努力の成果】を得られたことで成長の実感をできたこと、成功した際には親からの【褒められた意見】を得ることができ、また成績の下降や受験失敗(浪人生活)などの挫折が発生した際に、親が叱責したりするなど【否定されなかった】ことが要因として見いだされた。【個人的な困難】が発生した背後には、親からの無関心を感じて不安に思ったり、学習面で放任されることによって自身の価値や、挫折した際に親が頼れないことに不安を感じたことが挙げられた。そのため、自身の能力を再確認できたり、親からの見守られている感覚が得られることによって解決されていたように、この径路においては親の期待を源とするトラブルが見られることは少ないと考えられる。

親からの期待において、【一方的・強制的・厳しい親子関係】を経験した際には、大きく分けて2つの径路が見られる。適応的な径路では学校や友人関係などの【家の外の居場所】が確保されていることで、家庭では得られない安心感や承認を得られることによって精神的負担を軽減していた。また子ども自身が主体的に行った対処法として、親が得る【情報のコントロール】では、厳しい親以外の家族の協力を得るなどにより、一時的な成績の低下や息抜きを当該の親に伝わらないようにすることで衝突を回避することが挙げられる。【決定的破綻の回避】では、表面的迎合や自身の反抗的態度の抑制、意図的に議論のすり替えや結論の先延ばしを行うことが例として挙げられる。【情報のコントロール】および【決定的破綻の回避】は、ともに正面から親と対面することを避けることによって問題の発生や深刻化を回避することにつながっていた。これらの径路において特徴的なのは、進路決定の際には親の期待通りにせざるを得なかったが、その状況を自分のものであると受け入れ、「主体的に選択している感覚」を獲得しており、その後の生活・対処において自己決定的に行動していたことである。

この段において、【一方的・強制的・厳しい親子関係】を経験したうえで適応的な径路を取らなかった場合、および【自分のものではない決定】を感じた場合では、「主体的に選択している

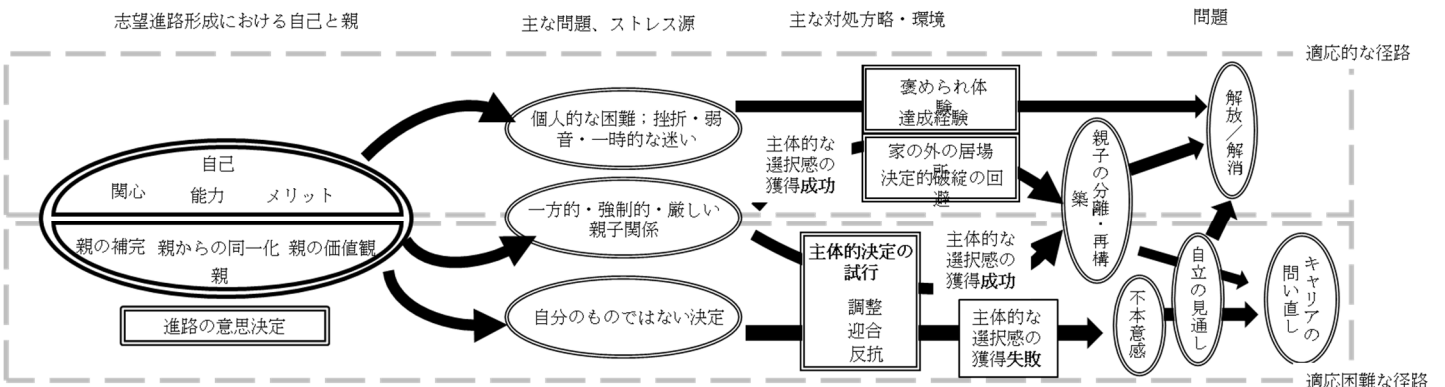


図2 進路決定時において生じる問題とその対処についての総合的なモデル

感覚」の獲得を試みる。特に後者では、親がたとえ強い態度ではなくとも、ともすれば指示ともいえるほどに明確に子どもに期待し、時には子ども自身の希望を否定していた。この径路では全体的な親子関係が良好ですらあったが、それゆえに子どもの視点から割り切ることが難しく、ともすれば【一方的・強制的・厳しい親子関係】よりも適応に困難である場合が見られた。親の期待と自身の希望との【調整】や一時的なごまかしを含む【迎合】や期待に反した行動をとる【反抗】など、様々な行動が見られ、この段において「主体的に選択している感覚」が獲得できれば、適応的な径路に進むことができる。

それが難しい場合には、【不本意感】を抱えながら模索していくことになる。その場合は、時間経過や環境の変化によってそのキャリアにいたまま自立、主体的に選択を行う機会が得られる場合もあれば、完全に【キャリアの問い直し】から再スタートを選択する場合もある。いずれにしても、親の期待に対していずれかの段において「主体的に選択している感覚」を獲得し、選択することが期待に対する適応を促す要因の一つであると考えられる。

< 引用文献 >

Oishi, S., & Sullivan, H. W. The mediating role of parental expectation in culture and well-being. *Journal of Personality*, 73, 2005, 1267-1294.

池田幸恭. 大学生における親の期待に対する反応様式とアイデンティティの感覚との関係. *青年心理学研究*, 2009, 21, 1-16.

青木みのり. 子どもに寄せる親の期待. *児童心理*, 64, 2010, 312-322.

Biran, M.W., & Reese, C. (2007). Parental influences on social anxiety. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 55, 282-285.

抱井尚子. 混合研究法. 質的研究法マッピング, 2019, 新曜社, pp.232-240.

安田裕子 他 (編). TEA 理論編: 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ, 新曜社, 2015.

春日秀朗 他. 親の期待認知が大学生の自己抑制型行動特性及び生活満足感へ与える影響. *発達心理学研究*, 25, 2014, 121-132.

鈴木有美. 自尊感情と主観的ウェルビーイングからみた大学生の精神的健康. *名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要*, 49, 2002, 145-155.

平井明代. 教育・心理系研究のためのデータ分析入門, 東京都書, 2012.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 春日秀朗
2. 発表標題 親の期待に対する対処方略と関連する要因：進学期待を中心とする医学部進学者の語りから
3. 学会等名 日本家族心理学会第38回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------